歴史探訪

「うつくしま」への系譜

海を越え、世代を超えて――
語り継がれる青い目の人形

昭和の初期に、アメリカから日本に贈られた「青い目の人形」――。彼女たちは、日米の子どもたちの心と心を結ぶ”親善使節“でした。その後、太平洋戦争が起こり、交流の想いは踏みにじられました。この苦難の時期を乗り越え、人形の一部はいま、全国で大切に残されています。人形は、人々の心のシンボル。彼女たちがわたしたちに語りかけるメッセージとは何なのでしょうか。彼女たちの足跡と今を、追いかけてみました。

■歓迎された友情のシンボル

それは昭和2年（1927）のことでした。アメリカ生まれのかわいい人形が、日本の子どもたちへ、その年のひな祭りのプレゼントとして届けられました。贈り主は、親日家で世界児童親善会の幹部を務めていた、シドニー・L・ギューリック。このころ、アメリカでは日本人移民を排斥する運動が高まり、これに心を痛めたギューリックが、日米の友情の架け橋として、人形を贈ることを全米に呼びかけたのです。「異なる国の子どもたちが、心をふれあい、お互いをもっと理解し、友好の気持ちを表す機会を

大正時代に作られ、当時広く知られていた野口雨情の「青い目の人形」の歌でみんなに迎えられたバーニスちゃん（郡山市立守山小学校所蔵）。戦時中は校内の物置に隠し守られ、現在は昇降口に展示されています

昭和2年当時バーニスちゃんがかぶっていた帽子と、守山小学校に届けられた英文レター

福島市荒井に建つ海外渡航記念碑（大正六年建立）。明治から大正にかけて、日本から海外への移民が増えていたことを物語ります。当時、日本人移民に対するアメリカの排斥運動があったことから、「異国間の相互理解を妨げるのは、大人たちによる偏見だ」「子どもたちへの教育によってのみ、世界平和がもたらされる」というギューリックの想いが高まり、それが日本への人形贈呈につながりました

与えたい。そんな教育こそが、世界平和をもたらすに違いない」――そんな想いで始まった呼びかけに大きな反響があり、アメリカの少女たちの手作りの衣装を装った1万2千体余りに及ぶ人形が、日本に贈られました。

日本に着いた人形たちは大歓迎を受け、日本国際児童親善会会長を務めていた渋沢栄一をはじめ、東京の皇族の令嬢や高官列席の歓迎会が催されたことにより、ただの人形ではない「親善使節」として全国に広く認められるようになりました。その後、人形たちは文部省が中心になって全国各地の幼稚園・小学校に贈られ、福島県には323体届いたといわれます。人形は、子どもたちにとっては待ち遠しいものでした。各地で学校をあげての歓迎式が催され、その愛らしさへの感動と驚きは、忘れがたいものとなりました。そして同年、この人形のお礼にと、贈られた学校では募金を始め、日本人形58体が答礼使節としてアメリカへ贈られたのでした。

■苦難を乗り越え、守られた人形

ところが、太平洋戦争が起き、日米の戦いが

激化すると、人形たちにも不幸が押し寄せました。青い目の人形は「仮面の親善使」と呼ばれ、敵対心高揚の「ひとがた」として、全国の幼稚園や小学校で壊され処分されたのでした。しかし、かわいい人形には罪はありません。このような厳しい戦時下にあっても、人形に託された意義と戦争の愚かさに冷静な目を向けながら、人形を隠し、守ろうと考えた人々がいました。これは、今でこそ「よくぞ隠した」と、美談として語ることができますが、国や軍の方針が絶対であった当時の状況を考えれば、大変な勇気と決断だったことでしょう。

このような不幸な時代を経て、隠されたり、所在が分からなくなったりしていた人形が、戦後に再びその姿を現しました。天井裏や物置、あるいは資料室の片隅などで、そっと生き延びていた人形たちは、現在全国で二百十数体、県内では十七体の現存が確認されています。そしていま、人形交流のことを伝え聞き、心打たれた人々が、各地で交流の歴史を学び合い、人形が無言で語るメッセージを未来へ伝えようとしています。人形たちは「友情のメッセンジャー」として、確かに復権を果たしたのです。

平成元年秋、全国に残った人形のうち、90体ほどが選ばれてアメリカに里帰りしました。福島県からは荒井小（福島市）のメリーちゃん（右）と、白河第二小（白河市）のベティちゃん（左）が海を渡りました（ベティちゃんの前にあるのは、初めて日本に渡ってきた時に添えられていた、人形のパスポート。服も当時のものです）

「青い目の人形」について、今年度の学習発表会で発表した守山小学校の子どもたち。「以前は『ちょっと怖いな』と思っていた人形ですが、昔のことを知ってからは、かわいいな、大切にしたいな、と思うようになりました」と、話してくれました（右端は原田校長先生）

昭和２年に人形の「歓迎の辞」を読んだ真壁花さん（旧姓熊田）。その内容は、人形に対する少女の思いやりに満ちています

■伝えていきたい、優しさと勇気

バーニスと名付けられた人形が、郡山市立守山小学校に届けられたのは、昭和2年の12月3日のことでした。その日、盛大に行われた歓迎式で、児童総代として人形の「歓迎の辞」を読んだ真壁花さん（旧姓熊田・当時尋常高等科2年）に、お話を伺いました。

「その日は、紫のカシミヤの袴をはいて、講堂で全校生や保護者が集まる中、歓迎の言葉を読み上げました。壇上で初めて人形を抱き上げた時の感激は、今でも忘れられませんね。目を開けたり閉じたりするお人形のかわいらしさには驚きました」と、花さんは、まるで昨日のことのように目を輝かせて話します。「戦後、人形が現れた時に、わたしが縫った新しいお洋服を着せてあげたことも、いい思い出ですね。人形が守山に残っていることは、わたしにとって誇りです」。――そこには、遥かな地から渡ってきた人形への優しいまなざしがありました。

そんな花さんの存在を探し出したのは、守山小学校の原田校長先生です。「学校に残された『歓迎の辞』の原文に込められた優しさに、心を動かされたんです」と、先生は話します。「なれない日本に来て、さぞさびしく心細いでしょう。私等はやさしく真心をこめていたわり、なぐさめてあげましょう。そうしたならば、お人形さんも我守山校の生徒を母国のやさしい少女たちと同様に親しみ、なつくでしょう。そして共に遊び、学びましょう」――そんな歓迎の辞を読んだ少女の優しさ、そして当時、日米の子どもたちの間で人形の交流が生まれたという事実に、何とも言えない感情がこみ上げたという先生は、このことを6年生の総合的な学習の一つとして取り上げていこうと思い立ちました。「昔、子どもたちが持っていた人形への優しさと、厳しい状況の中で人形を隠し守った勇気。これはどうしても今の子どもたちに伝えていかなくては、と感じたんです」。

そして子どもたちは、人形について丹念に学び、今年度の学習発表会でその成果を披露しました。その日は、保護者の方々も初めて知るような事実に驚き、人形が地元の誇りとして再認識された日でもありました。そこには、時代が変わっても決して変わることのない、変えてはいけない「大切な心」を、真剣に学び合う人々の姿がありました。

人形に込められた友情、そして平和の大切さと交流への願い――それらを確かにつなぎ、伝えていくのは今のわたしたちです。21世紀を迎え、これからどんな友情と交流をはぐくみ、築いていけるのか。それが今のわたしたちに問われているのではないでしょうか。